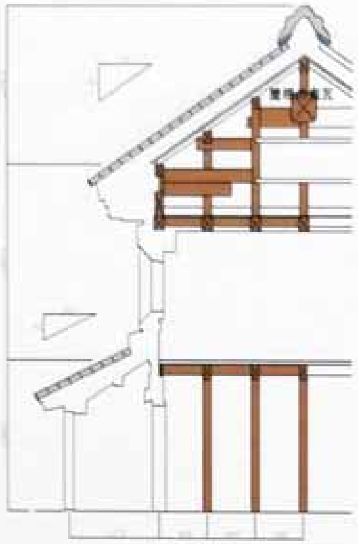
復活する重伝建！～有形文化財を守る地域～

正文堂

立面図



断面図

概要

建築年代は現存する棟札により、明治13年（1880年）4月9日上棟。
享保年間（1716～1736）には本の販売を行っていた。
1974（昭和49）年に県指定有形文化財（建造物）に指定され、
重要伝統的建造物群保存地区内の建物でもある。
・2階建の土蔵造り。
・屋根は桟瓦葺き切妻造。
・大黒柱は欅材。
・2階窓は開き戸
さらに横引きの土戸に板戸と2重の防火設備。
大工：草野文三郎
　　　柳沢重蔵

外観　建築当初のまま
内部　1階店舗の表側の土戸が失われた
　　　それ以外改造なし
　　　天井床梁は欅材
　　　周囲に設けられた乾燥用の棚も欅
　　　2階は当初、倉庫だったが大正期に座敷に改装
　　　店舗の後方にある木造2階建の住居部分は、大正期に
　　　伊能家の酒蔵の材木を用いて改築した。

江戸時代の町家に用いられた黒壁土蔵造の店蔵の形式をよく伝えている。
意匠、技術ともに県内の町家建築の中でも特に優れている。
佐原の町並みの中で、最も保存状態の良い蔵造の町家。

平面図

設計趣旨

近年、空き家の増加により、建物の老朽化、倒壊の危険性といった問題が発生してきている。
千葉県香取市佐原、この地域も空き家問題を抱えている地域の1つである。この地域は江戸時代に水郷の町として繁栄し、江戸の文化を取り入れつつ独自の文化を築き上げてきた。
その1つとして正文堂書店は1974（昭和49）年に千葉県有形文化財にしてされ、他にも小野川沿岸や香取街道といった古き良き町並みが残っている。
その反面、住みにくい、制限がある、プレッシャーがかかるといった原因によって重要伝統的建造物群保存地区内（重伝建）の建物が空き家となり、様々な問題をもたらしてしまう。
そこで、重伝建の建物を改装し、住みやすく誇り持てるような案を提案する。
この作品は佐原の県指定文化財である正文堂書店を改装することによって歴史や文化、伝統を残し、地域の発展とともに重伝建の価値を見出してもらうために考えた。
そもそもなぜ歴史や文化、伝統を伝える必要があるのか、重伝建の価値とは何か。
それは地域を活性化させるには過去を理解し、同じ過ちを繰り返さないとともに、発展させるための糸口を見つけるためである。
また、重伝建の価値として3つの価値があげられる。「住む」、「保存する」、「伝える」価値である。
これらの価値は重伝建に居住する事によって見出され、誇りある佐原となる。今で築き上げた暮らしを住むことによって保存し、伝える。これこそが地域の暮らしのあり方だと私は考える。

3つの価値

「保存する」価値

県指定有形文化財に住む上で、「保存する」といったことが義務化される。保存する上でプレッシャーを感じるのではなく、文化財を自らの手で形を維持し、保存することによって社会に貢献している感覚を引き出す。

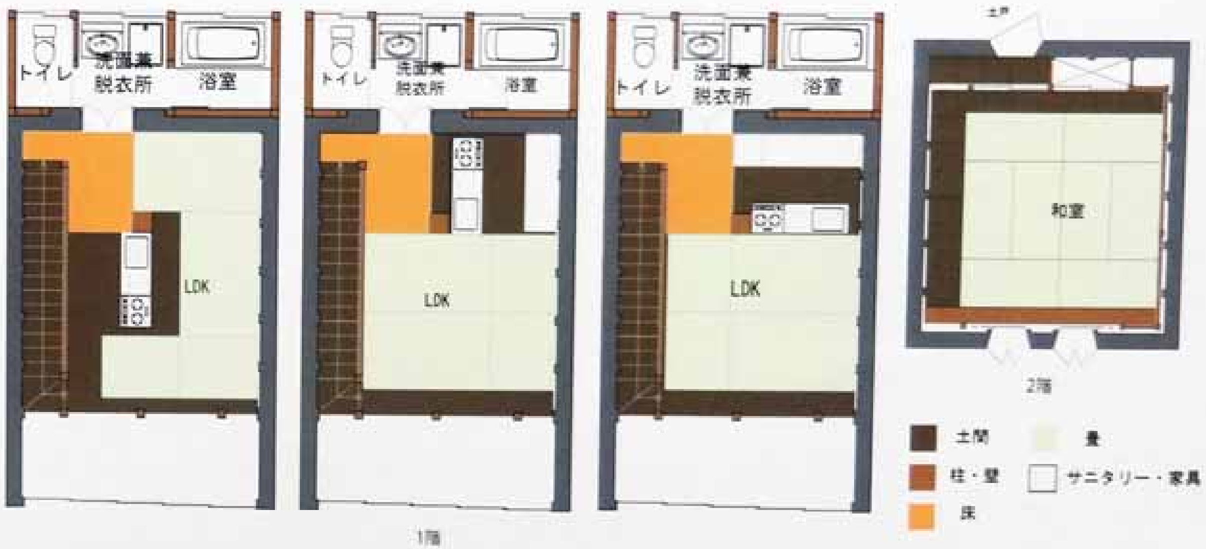
「住む」価値

県指定有形文化財に住むというのは、欠点はあるものの珍しい。また、住むことによって普段とは違う雰囲気や歴史的な価値が身につく。

「伝える」価値

人が有形文化財に住み、保存することによって次の世代へその建物を通じて、歴史や伝統、文化などを伝えられて誇りを感じることができる。

平面図



重伝建復活の流れ（→）

改装前

①文化財に指定されているため、制限が厳しく、改装が難しい。
②元々蔵だったため、採光や通風が期待されない。
③以上の理由などにより、住む人や後継者が減っている。
④空き家になり、取り壊せないため、建物の存在意義がなくなってしまう。
⑤価値に気付かず、気づく機会も少ない。
⑥観光客が増加せず、市内は賑わいにばらつきがある。

改善点

①壁を設けず、間取りをあらゆる状況によって変化できるようにした。また、増築しサニタリー部分は新たに建築した。
②壁をなくすことによって採光をなるべく取り込み、空気の流れを良くした。
③書店である店舗住宅を専用住宅にすることによって居住する人が増えてくる期待ができる。
④外装は変えず、火災で焼損した土壁を復原。内装はなるべく柱が見えるようにし蔵の雰囲気を感じてもらう。
⑤住むことによって3つの価値をなんとなく感じてもらう。
⑥商店が多い町で書店をやめて住居にした。よって身近に店があり、近所からも目を引く存在となる。

改装後

①自由な空間となり、住む人や環境によって変化する。
②風通性を活かした暮らし方が見つかる。
③住む人や後継者の増加に期待できる。
④住居となり、町の繁栄に大きく貢献する。
⑤価値に気づき、次世代に伝わる。
⑥観光客ではないが、佐原りそういった有形物が増加すれば町が繁栄する。